

編集顧問

阿部 弘
岩崎 喜信
大本 堯史
河瀬 斌
菊池 晴彦
桐野 高明
佐野 圭司
高倉 公朋
田中 隆一
西本 詮
橋本 信夫
早川 徹
平川 公義
堀 智勝
吉田 純
吉本 高志

編集委員

新井 一
岡田 芳和
片山 容一
齊藤 延人
佐々木 富男
高安 正和
伊達 勲
富永 悌二
寶金 清博
宮本 享
吉田 一成
吉峰 俊樹
若林 俊彦
(五十音順)

本号の扉に、塩川教授が「まごころの医療」について書いておられる。多言を要さないまさにど真ん中直球とも言えるべき内容であり、小生ばかりでなく多くの先生が素直に頷かれると思う。特に若い先生は先端手技を求めるばかりでなく、一般診療科として脳神経外科の common disease をまず manage できなければならないというくだりに、異を唱える先生はいないと思う。塩川先生の「まごころ」という面はよい言葉を敢えて掲げる真摯さと、自ら率先して「まごころの医療」の範を示していることに敬服いたします。

総説では「脳動脈瘤発生・増大のメカニズム」と題して、最近の基礎的脳動脈瘤研究が要領よく俯瞰されている。脳神経外科医にとって脳動脈瘤は長い間、クリップで挟むべきふくらみか、コイルを詰めるべき造影剤のプールでしかなかったが、その発生・増大のメカニズムに光があてられると新たな容貌を呈する。近い将来、薬物治療が現実のものとなるかもしれない。患者にとっては大きな福音である。しかしここでも研究すればするほど、手術という己の立ち位置を削っていかなければならない外科医の皮肉について考えさせられる。もう1つの総説も重傷頭部外傷における脳内 microdialysis についての労作であり、大変教育的内容である。Microdialysis の原理から臨床応用、筆者らの経験症例まで詳述されており興味深い。

最近、若者の視線が下向き、内向きになっていると危惧されている。例えばハーバード大学への留学生が、中国・韓国に比べて圧倒的に少なくなったことなど。確かに思い至る点もある。本年の日本脳神経外科学会学術総会の「夢の実現に向かって自己の主張を！」というテーマもそのような傾向を踏まえてのことかもしれない。1960年代に「青年は荒野をめざす」という小説があったが、今や存在感の薄れた荒野はともかく、上も外も目指さない若者であれば確かに心配ではある。青年と言えば外を目指して挑戦するものというステレオタイプの見方がわれわれにあるからかもしれない。しかし、古来日本人が外から学び、学習能力を発揮して換骨奪胎し独自の文化とし繁栄を築いてきたことを思えば、狭い組織、日本だけを見ていて外の世界を見ないとしたら、若者は将来どうなるのか。例年になく猛暑にさらされての杞憂であればよいとは思ふ。